



Data

監督: グレイグ・ギレスピー
 製作・脚本: スティーヴン・ロジャース
 出演: マーゴット・ロビー/アリソン・ジャネイ/セバスチャン・スタン/ポール・ウォルター・ハウザー/ジュリアン・ヌ・ニコルソン/マッケナ・グレイス/ケイトリン・カーヴァーノ/リッキー・ラサート

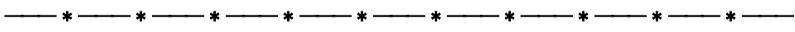
👁️👁️ みどころ

女子フィギュアスケートは氷上の華。そこでのトリプルアクセルは力技だが、美しく可憐な女子選手は常に人気の的だ。いやいや、一人だけ例外が！

それがトーニャ・ハーディングだ。彼女は1994年のリレハンメル冬季オリンピックで「靴ひもトラブル」をアピールしたが、ホントに「ナンシー・ケリガン襲撃事件」に関与していたの？

亀田三兄弟の実力は認めても、その育て方には批判が多い。すると、4才のトーニャに暴言と暴力の限りを尽くしながら一流の選手に育て上げた母親を如何に評価？この母親にしてこの娘あり！さらに、この女にしてこの男あり。19歳での幸せな結婚が幻影にすぎなかったこともしっかり確認したい。

それにしても、全米フィギュアスケート協会のトーニャへの“終身刑”のような判決の是非は？マーゴット・ロビーの主演女優賞ノミネートおめでとう！アリソン・ジャネイの助演女優賞受賞おめでとう！



■□■ 「あの襲撃事件」をネタに本作が！ ■□■

女子フィギュアスケート界は、時代毎に多くのスターを登場させてきた。そして、ジャネット・リンや浅田真央らをはじめとして、そのスターたちはいずれも「氷上の華」という存在だった。プロレスは最初から善玉と悪玉の役割分担、そして、勝者と敗者が決まっている「興行」だが、女子フィギュアスケートはあくまで、氷上での技術と美しさを競う競技。したがって、その世界で「氷上の華」になるのは素晴らしいことだ。しかし、1991年に20歳で女子フィギュア界初のトリプルアクセルを成功させて優勝しながら「氷

上の華」になれなかったのが、本作の主人公トーニャ・ハーディング（マーゴット・ロビー）だ。

私も当時、彼女の名前は知っていたが、彼女が世界的に有名になったのは、何と「ナンシー・ケリガン襲撃事件」のため。これは、1994年の1月6日にリレハンメルオリンピックの代表選考会となる全米選手権の会場で発生した、優勝候補とされていたナンシー・ケリガン（ケイトリン・カーヴァー）が、練習後何者かに右ひざを殴打され怪我をした事件。これによって、ナンシーはこの大会の欠場を余儀なくされ、トーニャ・ハーディングが優勝した。しかし、事件発生から約2週間後にトーニャの元夫ジェフ・ギルリー（セバスチャン・スタン）らが襲撃事件の犯人として逮捕され、トーニャの関与も疑われたから大変。まさに、女子フィギュア界における前代未聞の事件に発展した。女子フィギュア界では可憐で美しい選手が多いが、実はその内心まではわからない。ところが、トーニャは技術は高くても、内心が意地悪いうえ、外ヅラでも女子フィギュア界の嫌われ者だったから、マスコミはこの事件を契機として一斉にトーニャへの攻撃を開始した。

スクリーン上では現実にトーニャがナンシーに対して暴行を加えているシーンが登場するが、さてこれはホント？トランプ大統領が登場した後のアメリカでは、フェイクニュースが花盛りだが、ひょっとしてこの映像もフェイクニュース？「ナンシー・ケリガン襲撃事件」は1994年1月に現実に起きた事件だから、裁判等によってその真相は解明されているのでは・・・？いやいや、実はそうでもないらしい。しかして、制作・脚本のステイヴン・ロジャースとクレイグ・ギレスピー監督は「ナンシー・ケリガン襲撃事件」をネタに本作を！

■スクリーン上でのスケートシーンを如何に撮影？主演女優賞は？■

私たちはオリンピックや世界大会ごとに女子フィギュアスケートの試合をテレビで観戦しているが、そのカメラはすべてスケートリンクの外に備え付けられたもの。そんなカメラに慣れている私たちの目には、本作でトーニャ役を演じたマーゴット・ロビーの本物と同じようなスケートシーンは迫力がある。まさか、マーゴット・ロビーが本当にトリプルアクセルを飛んでいるはずはないが、それを如何にフェイクではなく、本物らしくみせるかが俳優の演技力であり、カメラマンの技術だ。『レッドスパロー』（18年）では、ロシア人のバレエリーナ役を演じた、イギリス人の美人女優ジェニファー・ローレンスがいかにも本物らしくバレエリーナ役を演じていたが、そこでは、踊りの技術はともかく、体形のアンバランスさ（太さ）が目立っていた。それと同じように、私は本作でもマーゴットの体格の太さが少し気になったが、ラストで見せてくれる本物のトーニャも女子フィギュア選手としては少し太めだから、まあ、そこはいいことに・・・。

トーニャが審査員や多くのフィギュアファンから嫌われたのは、生来の生意気さや粗野な言葉づかみの他、曲選びにもあったため。そのため、彼女のステップは他の女子選手と

は違う独特のものがあつたらしいが、それを演技に取り入れるとトーニャとの同化がしやすくなるというメリットがあるようだ。そんなこともあって、トーニャ役を演じたマーゴット・ロビーのフィギュアの演技はグッドだ。『ロッキー』シリーズでシルヴェスター・スタローンがロッキー・バルボア役で、『あゝ、荒野 前篇・後篇』（17年）で菅田将暉が新宿新次役で、『勝利者』（57年）で石原裕次郎が夫馬俊太郎役で、それぞれ「炎のボクサー」役を演じたように、本作では、マーゴット・ロビーが女子フィギュア選手トーニャのスケートシーンを如何に本物らしく演じるかに注目！そして、本作の演技によって、マーゴット・ロビーが第90回アカデミー賞主演女優賞にノミネートされたことに拍手！

■□■第90回アカデミー賞助演女優賞はこの母親で決まり！■□■

第90回アカデミー賞の主演女優賞は『スリー・ビルボード』（17年）のフランシス・マクドーマンドが圧倒的な存在感を示していたため、『シェイプ・オブ・ウォーター』（17年）のサリー・ホーキンスや『レディ・バード』（17年）のシアーシャ・ローナン、そして、本作のマーゴット・ロビー等を押しのけて選出された。しかし、アカデミー賞助演女優賞は、本作でトーニャの母親ラヴォナ・ハーディングを演じたベテラン女優のアリソン・ジャネイで決まり！これは、第87回アカデミー賞の助演男優賞が、『セッション』（14年）（『シネマ35』40頁）で鬼教師役を演じたJ・K・シモンズで決まったのと同じだ。

父親で鬼コーチという存在には、古くは『巨人の星』における星飛雄馬の父親である星一徹がいる。現実にも、亀田三兄弟の父親・亀田史郎氏や、若貴兄弟の父親で、元大関の貴ノ花等がいる。しかし、本作でアリソン・ジャネイが演じたラヴォナのように母親で鬼コーチという存在は珍しい。アメリカは多民族国家だし、日本以上に離婚、再婚が日常茶飯事だが、トーニャは何とラヴォナの4番目の夫との間に生まれた、5人目の子どもというからビックリだ。本作導入部は、娘にスケートの才能があると考えたラヴォナが、4歳になったばかりのトーニャをコーチに託するシーンから始まるが、そこでみせるラヴォナの態度の悪さ、ガラの悪さはピカイチ。それは、亀田三兄弟の父親・亀田史郎のそれをはるかに上回っている。日本では昨今、しつけに名を借りた子どもへの暴力に反対する意見が強くなっているが、本作をみれば、ラヴォナのトーニャに対する暴力が日常茶飯事だったことがよくわかる。

そんな家庭環境と教育環境の中で、トーニャはスケートだけが人生という形で育っていったが、思春期を迎えると母親との関係は・・・？さらに、ボーイフレンドができる15歳にもなると、彼女の男関係は・・・？

■□■この女にしてこの男あり！なぜトラブルばかりに？■□■

トーニャ・ハーディングはフィギアスケートの名選手としても特異な存在だが、本作を観ていると、一人の女性としての男性観や結婚観の特異性もよくわかって面白い。トーニ

ヤが15歳の時に恋におち、相思相愛の中で19歳の時に結婚した男はジェフ・ギルーリー。毎日厳しい母親に接していたトーニャにとって、優しいジェフはボーイフレンド兼父親のような存在だったが、スクリーン上を観ていると「こりゃ、完全に美化しすぎ」「そのうち化けの皮がはげぞ」と思ってしまう。すると、案の定・・・。

それにしても、トーニャと結婚した後のジェフの暴力亭主への変身ぶりをみていると、いくら何でもこりゃひどい。暴力の程度も常軌を逸したものだ。しかし、母親の暴力に慣れてきたトーニャはそれをじっと我慢。そればかりか、そんな中で結婚1年目の1991年に、20歳でアメリカ女子ではじめてトリプルアクセルを成功させた（世界では伊藤みどり以来2人目）のは立派だ。しかし、彼女が結婚生活で幸せだったのはこの時期までだったらしい。

今でこそDV（ドメスティック・バイオレンス）という言葉が定着しているし、裁判所による「接近禁止命令」という法的防衛手段も定着しているが、当時トーニャが「接近禁止命令」を取得するまでは試行錯誤の連続だったはず。しかも、ジェフは平気でそれを無視したから、荒れたジェフはまるで猛獣そのものだ。もっとも、私にはスクリーン上に観るそんな時々のトーニャにもどこかに甘さが・・・。まあ、夫婦喧嘩なんて周りから評論しても仕方ないのだが、この2人はなぜいつもトラブルばかりに・・・？

ちなみに、ジェフを演じたセバスチャン・スタンは役作りのためにジェフ本人にも会ったが、「彼はこの映画が作られることを喜んではいなかったし、脚本も読みたがらなかった」らしい。本作で描かれるジェフはかなりの問題児だから、ジェフ本人がそんな映画の製作を嫌がったのは当然だろう。しかし、彼がナンシー・ケリガン襲撃事件の張本人のように描かれている本作の公開差止（の仮処分）等の法的措置を取らなかったのは、事実上、自分の犯罪性を認めていたため・・・？

■□ケリガン襲撃事件の真相は？これもフェイク？■□

ナンシー・ケリガン襲撃事件の首謀者は誰か？ジェフやトーニャらはそこでどんな役割を果たしたのか？しかし、その処分は？それについては、本作ラストで明らかにされるのでそれに注目！しかし、全米スケート協会やアメリカオリンピック委員会、さらには裁判所の認定が必ずしも真実に合致しているかどうかはわからないのは当然だ。本作を観ていると、その感を強くするが、その理由の1つが、ジェフの友人で自分自身をCIAの諜報員だと名乗る男シェーン・スタント（リッキー・ラサート）の存在と何とも奇妙な動きだ。

コトの発端は、1992年のアルペールビル冬季オリンピックでトリプルアクセルの失敗で4位という結果で終わり、2年後のリレハンメル冬季オリンピックに向けて猛特訓をしていたトーニャに届いた差出人不明の脅迫状だ。これに恐怖心を抱いたトーニャは、1993年の北西部予選を棄権したが、そこでジェフとシェーンが考えた「名案」がトーニ

ヤのライバルであるナンシー・ケリガンに同様の脅迫状を送ること。彼らはそれによって始めてトーニャとケリガンがフェアな立場で競争できると考えたそうだから、彼らの知的レベルは一体どうなっているの・・・？

さらに、この2人の意思疎通にはいつも大きな齟齬があるようで、この明白な脅迫行為（犯罪行為）についても、単なる匿名の手紙による脅迫だけなのか、それとも実際に暴行を加えるのかについての両者の思惑が大きく食い違っていたらしい。そこらあたりの2人のトンチンカンな会話を観ていると、ナンシー・ケリガン襲撃事件の真相は全くわからなくなってくる。したがって、本作がスクリーン上で見せる映像も全体としてフェイクでは？そう思う面も多いが・・・。

■□■リレハンメル大会の結果は？靴ひもトラブルに注目！■□■

日本勢は2006年の冬季オリンピックでは女子フィギアスケートの荒川静香が金メダルを獲得した。しかし、1994年のリレハンメル冬季オリンピックでは、荻原健司のノルディック複合から葛西紀明、原田雅彦の男子スキージャンプが目だただけで、女子フィギアスケートは不振。佐藤有香が女子シングル5位に入賞しただけだ。しかし、高橋真梨子が歌ったリレハンメル冬季オリンピックのテーマソングである「遙かなる人へ」は私は当時よく歌ったこともあり、今でもよく覚えている。

1994年のリレハンメル冬季オリンピックの女子フィギアスケートの試合で私がハッキリ覚えているのは、トーニャのスケート靴ひも事件だ。音楽が鳴り始め演技をスタートしたのに途中でそれを中止したトーニャが、審判団の方に向けて進んでいったからアレ・・・。こりゃ一体ナニ？会場内の観客はもとより、世界中のテレビの前の人たちがその異様なシーンにアッと驚いたものだった。靴ひもを締め直した後のトーニャの演技はそれなりのものだったが、結果は8位。この判定にトーニャは不満タラタラだったが、これだけ会場のファンや審判団を敵に回してしまえばそれも仕方なし。ちなみに、そこでの優勝はオクサナ・パイウルだったが、会場の同情を集めたケリガンは2位で銀メダル。さあ、あなたはこのスケート靴ひも事件とこの判定をどう考える。

■□■襲撃事件へのトーニャの関与は？その処分は？裁判は？■□■

1994年1月6日に発生したナンシー・ケリガン襲撃事件の2週間後にジェフとシェーンは逮捕されたから、ジェフの妻であるトーニャの関与が疑われたのは当然。そのため、全米スケート協会とアメリカオリンピック委員会は聴聞会を開き、トーニャのオリンピック出場権をはく奪しようとしたが、彼女は聴聞会を妨害するために訴訟を提起したからすごい。もっとも、裁判所でのジェフやシェーンそしてトーニャの主張を聞いていると、かなり支離滅裂だから、その結果は・・・？

結果的にトーニャがリレハンメル冬季オリンピックに出場できたのは、更にトーニャが

オリンピック委員会を告訴するという「禁じ手」が功を奏したのかもしれない。しかし、これによってトーニャが更に多くの敵を作ったことも明らかだ。しかして、何とか大会には出場できたものの、そこでの靴ひもトラブルの発生と最終順位は前述のとおりだが、オリンピック後に延期されていた裁判が再開されると、その結果は・・・？全米フィギアスケート協会の登録抹消という彼女にとっては終身刑のような結果にトーニャは涙ながらに「スケートだけは続けさせてほしい」と訴えたが、さて、その声は法廷に如何に届くのだろうか・・・？

2018（平成30）年5月12日記